

現代中国内陸部小都市〈藁城市〉の発展についての第一次報告 ——日中共同研究のひとつの試み——

The first report on the development of Gao Cheng, a small city of inland China :
A Japan-China collaborative research effort

小 川 勝 一* 曾 貧**

Shoichi Ogawa Zeng Pin

はじめに

日中共同研究の趣旨と視点

私（小川）は10年前、「日中共同研究の考え方（ノート）—その一」を書いた。（『長野大学紀要』、第17巻第1号、1995）

「その一（ノート）」論文で、その基本的目標を、次のように書いている。長野大学と中国・河北大学日本研究所と復旦大学日本センター（中心）との「大学間協力研究」（科研費）の前提を検討したものである。その時期（93年～95年）の「大学間協力研究」のテーマは、〈内発的発展論〉の視点からみた地域（長野・坂城、中国河北省・保定、中国上海を比較調査（企業・家族・教育）することであった。その調査の先行モデルとして参考にした典型的な研究は、鶴見和子・宇野重昭『中国における“小城镇”建設に関する研究』（NIRA叢書、1989）である。さらに展開されて宇野重昭・鶴見和子『内発的な発展と外向型発展』（1994）として刊行された。そして私と曾貧はその方向で共同研究を模索・探求してきた。〈内発的発展論〉は、宮本憲一が70年代後半から使われ、鶴見和子とお互いに示唆され、特に鶴見和子を中心に、西欧的、経済成長優先に対して「もう一つの発展論」を展開してきた。

この「大学間協力研究」を契機に我々は、日中

交流を中心に内発的発展論を模索・探求してきた。「大学間協力研究」は、その後多様に発展して、現在「戦略的連携支援事業」として文部科学省の重要な支援事業になっている。そして2008年度選定事業は54件になっている（たとえば長野県では、「大学間地域ネットワーク構築による高等教育の質保証と人材育成の実質化」で選定）。一方現代中国共同研究は初の大型共同研究である科学研究費補助金「重点領域研究」、「現代中国の構造変動」プロジェクトが推進された。（1996～98）

この10年間、中国では大きな変化が生まれてきた。最近、2007年度から「現代中国地域研究」推進事業が、研究拠点の形成およびネットワークの構築と「次代養成」をはかることを目指して行っている。この事業は、「大学共同利用機関法人・人間文化研究機構」が行っている。

これに対して、我々は、きわめて小さいが、目前（手弁当）の地域日中共同研究の「ネットワーク」を模索・探求してきた。大学中心ではなく、地域の高校教員（長野県）と共同する研究の条件を検討してきた。第一回は、1996年、北京大学、遼寧師範大学、大連大学などを訪問した。次に第2回、北京大学、復旦大学・環境科学中心、華東師範大学、河北大学、河北青年管理幹部学院などを訪問した（1997年）。継続して、2001年、長野

* 社会福祉学部教授

** 埼玉大学教育学部非常勤講師

県日中教育文化交流団を結成して訪中した。

(2001年3月25日～31日)。さらに長野県高等学校教職員訪中団で訪中した(2002年3月25日～3月31日)。民間の交流の具体的な条件を推進するものであった。この訪問で中央教育科学研究所(北京)、河北省教育工会も訪問した。続いて長野県高等教職組合訪中団で訪中した。(2002年3月25日～31日)この訪中で、長野県高等教職員組合と中央教育科学研究所との友好交流協定(案)を交渉し作成した。そして2002年7月に協定・調印をした。このように訪中を何回か行いながら、地域の「日中共同研究ネットワーク」の具体化を行ってきた。この地域の「日中共同研究ネットワーク」の推進に小川と曾貧が事務局の役割をしてきた。さらに日中教育文化交流団を結成して訪中した。(2004年8月15日～25日)。その中で、持続可能な発展の地域づくりの土壌を培うために環境教育を柱に訪問(中央教育科学研究所、北京大学・環境科学中心、瀋陽薬科大学、東北大学、遼寧師範大学など)を行った。この訪中で「日中環境教育共同研究会」の結成について中央教育科学研究所(北京)と合意した。この地域「日中共同研究のネットワーク」推進と平行して「日中教育研究交流会議」にも参加してきた。現在、曾貧は交流会議の事務局長である。

我々の先行研究である、鶴見和子・宇野重昭「中国における“小城镇”建設に関する研究」は、中国側の「費孝通」の影響を受けて行ったものである。西欧的な近代化に対して、中国の内発的な発展論として評価されている。費孝通は、「小城镇」を通して中国の民族を自省する社会学の建設を目指すものである。(シリーズ世界の社会学・日本社会学『費孝通—民族自省の社会学』、佐々木衛、2003年)。我々は、費孝通の調査・研究手法を参考にしながら調査・研究を行う予定である。また、最近費孝通の重要な文献がいくつか翻訳されている。『生育制度—中国の家族と社会』(1985)、『中华民族の多元一体構造』(2008)。さらに費孝通を検討し共同研究を進めたい。われわれの訪中の体験から、一つの結論として「日中共同研究ネットワーク」は小さく、対象も小さく限定することも重要ではないかと思っている。現在の中国は、むしろ「情報過剰」にな

り、本質が見え難くなっているからである。

＜藁城市＞研究の経緯

中国社会は、工業化・都市化へ進んでいるうちに、一方、世界市場をカバーする北京、上海のような巨大都市が形成されつつある。他方、大都市の周辺、農村地域にある地方小都市—「小城镇」も独自の発展の道を模索している。地方小都市の発展は、解体されつつある中国農村コミュニティの再編、工業と農業、都市と農村の格差を縮めるには、重要な役割を果たしている。今までは、中国の小都市研究に関しては、とりわけ、日中の共同研究においては、20世紀8、90年代の沿海経済発達地域の小都市の「内発的発展」が一番大きな成果として取り上げることができる。しかし、21世紀に入ってから、特に今まで開発に遅れている内陸部の地方小都市を対象とするモデル研究が思うほど進んでいない。

「内発的発展」の概念の提起者鶴見和子は、この概念が、特定の政治権力や経済権力に取り込まれ、政策決定に利用されることに、一貫して否定的な立場であった。そのため、「内発的発展」が、政策立案者に積極的に受け入れられることがなかったという面もある。

1987年、国連の「環境と開発に関する世界委員会」が、「持続可能な発展」という概念を提起してから、中国政府は、これを積極的に取り入れ、地方小都市の発展も「持続可能な発展」を政策目標としている。しかし、今までは、中国地方小都市の「持続可能な発展」の実践レベルの実情が決して明らかにされていない。

中国の内陸部小都市の実践状況を視野に入れ、「内発的発展」と「持続可能な発展」の関係性を明らかにすることは、われわれが考えている地域社会学研究の一つの重要な課題である。

現代中国は、農業大国から、工業大国に移行する途上である。内陸部の伝統的農業地域の工業化、都市化の進展は、沿海地域と比べ、遅れている。いままでの外来開発型経済にとって、内陸部小都市は、政策誘導、外資投入、加工貿易、立地経済などの側面において、不利な要素が多いことが容易に分かる。しかし、近年、状況が変わり、内陸部小都市は、自らの発展モデルを創出してい

る。内陸部小都市における、農業・農村・農民、いわゆる三農問題の解決、地域経済の発展、具体的にどのような情勢があるのか。これは、まず、我々が知りたい問題である。中国現地において、我々は、2007年8月11日から19日に調査を行った。

我々が選んだ調査対象は河北省藁城市である。理由としては、まず、この地域の特徴が、我々の関心と一致することで、それに、当市の市長を始め、政府弁公室の協力を得られることである。藁城市では、以下の数箇所を見て、第一次調査を終わった。

- ①経済技術開発区
- ②崗上鎮崗上村
- ③人民広場・水上公園
- ④人民医院
- ⑤梅花鎮

それぞれのところで、藁城市、この中国内陸部小都市地域の工業と経済、農業・農村・農民の状況、都市計画、社会福祉保障、歴史などを、我々自らの目で確かめ、関係者及び市長へのインタビューを行い、関連文献・資料を収集した。本稿の目的は、これらの内容を次の研究の基礎としてまとめ、今後の中国内陸部小都市の経済・社会発展モデル研究の作業課題を考えていきたい。

Ⅰ 「生物産業基地」—良村経済技術開発区—

藁城市は、河北省の中南部太行山東麓の平原にある河北省都石家荘市から西へ、30キロのところにあり。北東264キロに、中国の首都北京市がある。直轄市天津までは270キロである。

1989年7月に県から市に改制され、現在は、13の鎮、1の回族自治郷、合計239の村と1の経済技術開発区を管轄している。人口総数は74.6万で、その中、市区人口は10万あまりである。

我々は、北京から石家荘市まで、高速バスに乗って、3時間余りで着いた。帰りは、開通されたばかりの快速鉄道で、2時間しかかからなかった。

藁城はもともと、農業地域であった。1992年に経済技術開発区の設置に伴い、工業化の進展が著しくなった。2006年に、工業経済は、市全体GDPの51.4%に占めた。2007年末まで、市全体

に各種類の中小企業は26000に達している。大企業は主に、三つの工業園區に集中している。

我々の調査は、まず、「良村経済技術開発区」から始まった。

「良村経済技術開発区」は、藁城市の三つの主な工業園區、「良村経済技術開発区」、「新区」、「循環化学工業示範基地」の中で、最も古いところである。1992年にスタートして、現在も発展しつつある。面積は8.4平方キロ、三つの行政村を統括して、人口は23000である。

この開発区の中で、生物製造、生物農業、生物エネルギー、生物環境保護の企業が数多く集結されている。2006年現在、134社の生物工業、企業がある。5000万元以上の生物製薬会社は30がある。投資総額は46.5億元であった。開発区は、汚染のない集約化の道へ進んでいる。

開発区は、2005年7月に、「国家生物産業基地」として認定された。区内において、2006年、市の百分の一の土地で、市の総生産の一割、市の財政収入の四分の一を貢献した。

農村の荒野の中で、現在、工業、企業のほかに、新しく建設された生活施設、幼稚園、小学校、中学校、銀行なども現れた。開発区内では、農村の跡がほとんど見られない。きれいに区画された広い道路の両側に花草樹木で緑化され、一つ一つの工場、企業が、それぞれ大きな間隔を置きながら並べられ、ここでは、すでに城鎮化された印象が我々に残された。

開発区以外の新区を車で通ったが、こちらは旧市区の近いところにあって、発電場、汚水処理場、工場、道路、橋、住宅の建設が急ぐような景色であった。「循環化学工業示範基地」は、石油化学関連工業を中心に、石炭化学、塩化学、「三合一」の形で展開されている。それに、農業用化学工業などと、互いに促進し、補完し合う新型化学工業の体系が創り上げられている。

「藁城市国民経済と社会発展第11回5ヶ年計画綱要」によると、藁城市の工業発展は、「資源利用の集約化、産業配置の合理化、産業発展の関連化」の方向へ向かって、「資源節約型社会」の達成を目標としている。

以上の三つの工業園區は、藁城市の90%の大企業を集中した。

2007年末までに、藁城市の企業総数は、26000がある。従業員総数は、36.2万人であった。2007年に、藁城市全体のGDPは213億元（1元≒15円余り）で、税金収入は、10.03億元である。前年と比べ、それぞれの成長率は、15%と、25.2%である。その内、工業経済成長率は21%であり、全市GDPの76.7%、税收の54.8%に占める。

我々は、開発区を通して、藁城市が目指す工業化の方向は、環境に配慮する、集約、循環などの特徴を持っていることがわかった。

工業化の波の中で、農業・農村・農民の状況がどうなっているのか、それを知るために、我々は、開発の隣にある村を訪ねた。

II 「文明生態村」—崗上鎮崗上村—

藁城市は、年産食糧53.5万トン、良質な小麦、トウモロコシの生産、伝統の農業経済が有名である。2005年に農業省より、「全国食糧生産先進モデル県」と認定された。1999年以来、「国家農業総合開発項目県」、「国家指定の優良品質専用小麦モデル基地」、「低生産畑の改造」、「ハイテク農業実験」などの農業改良、発展の試みをしてきた。2004年から2006年までは「全国食糧生産先進県・市」の第1位である。2006年に「全国の発展の潜在力を持つ100個の小都市（県・市）」の20位に認定され、2007年2月、1530世帯を持つ藁城市南孟村が「国家新農村建設モデル村」と認定された。藁城市の食糧生産用農地面積は99.9万ム（ムとは中国の農地面積の単位、1ム≒200坪余り）、2007年の農業増加総額は39.6億元である。

藁城市の農業生産は、食糧以外に、野菜、果物、養殖などもある。現在、十ヶ所の「緑色農業基地」を建設中である。その内容は、10万ム良質小麦、2万ム有機野菜、1万ムの果物、一万頭の豚養殖、1万頭の羊養殖、1万頭の食用兔養殖、一万ム生態森林、10万羽産卵鳥、3000頭乳用牛、と緑色農業科学技術生産園區である。すでに、卵、野菜、梨、などの「緑色証書」が取得された。緑色農業示範区への総投資は、12.7億元になり、プロジェクト完成後に、年利益は6.5億元、市税が3.45億元に増える予定である。

石家荘市に隣接地域では、春と秋になると、

「緑色果物、野菜収穫祭」が開催され、大都市の観光客に、田園風景、田舎生活を体験させる「生態農業観光」がホットになっている。

我々は、藁城市中心へ向かう道路の両側にこのような梨園を見た。ここで、50個入りの1箱の梨を買うと石家荘市内より、3分の1くらい安い。藁城市に14の郷鎮、239の村がある。我々は、その中の一つ崗上鎮崗上村を訪問した。

崗上鎮は、経済技術開発区の隣にある。面積は48平方キロで、農地面積は、5.8万ム、人口4.7万。16の行政村を管轄している。我々が訪ねた崗上村は、農地面積2368ム、672世帯、2301人を持つ、鎮政府の所在地である。

村の農業は、小麦、トウモロコシの栽培を主としている。村の西隣に経済技術開発区がある。農業以外に、運送、サービスを中心に、村営企業は12があり、私営企業は40、家族経営は230がある。農業以外の従業員人口は400余りである。機動車両200台余りを持っている。

崗上村の村民センターで、我々は、村の書記から村の概況を聞いた。

ここで一番印象深いのは、「郷土文化功德録」と書かれた数冊のノートである。

1982年、崗上村の農民範振国さんは、道で一袋の小麦を拾った。彼は、それをすぐ村民委員会へ届けた。これをきっかけに、村は、彼を表彰し、このことをノートに記録した。ノートの名は、「郷土文化功德録」という。それからの20数年間、このようなことを記録する「功德録」は、139冊になり、全村600世帯の10万件あまりの「好人、好い事」を記録しつつある。

価値観が変わりつつある現代中国農村において、この方法は、よい伝統文化道徳の継承と称揚に大きな役割を果たしている。

崗上村には、蔵書8万冊の図書室がある。中では、多く農業専門誌、書籍がある。その隣に、民兵活動室がある。民兵制度が、古い時代からあったが、現在まだ、形として残されている。村の青年たちは、民兵活動を利用して、出会い、交流の場としている。それを中心に太鼓隊、踊り隊などの文芸組織が生まれ、文化活動が展開されている。活動室の四面の壁に隙間なく賞状が飾られている。

これらの伝統と結合している活動は、村に、新しい文化・道徳の気風をもたらした。それを表彰するために、1999年に、国から「全国文明村」の称号が贈られた。

我々は、また、この村の「外国語職業学校」と隣の80ムの「植物園」を訪ねた。

村長の紹介によると、「外国語職業学校」は、村の土地、投資で作ったもので、学校経営は、外部の専門家に任じたものである。学生は、現地の人が中心で、ほかの地域からの入学者も数が多い。卒業生は、全国各地で就職している。我々が訪ねた9月は、ちょうど中国の学校の新学年の開始である。校庭にある掲示欄に、卒業者たちの顔写真と就職先を書いた紙が張られている。

学校の裏にある植物園は、学校の課外授業と、休憩の場である。ここは、本来、村の植物栽培実験の地でもある。

村の街を歩くと、一般の農村によく見られる点在する家屋の景色はほとんどなかった。

この数年、崗上村の生活居住状況は、以前と比べ、大きく変わった。村民の6割、352世帯は、四つの標準化居民小区、19棟の住宅楼に住んでいる。住宅の集中化により、村の生活衛生状況が改善された。村に12人の清掃隊が成立され、ごみ運送車は2台を持っている。村の景観が変わったとともに、村の農地用面積が450ム節約された。

我々が知る藁城市政府の農村政策の傾向が、主に以下の六点がある。

- 1、食糧生産を重点とする。
- 2、農村に余る労働力の転移。
- 3、農村居住環境の改善。
- 4、農村文化、教育、医療、社会保障体系などの樹立。
- 5、農村の民主、法制化。
- 6、農村幹部人材の育成。

たとえば、食料生産の農地保護策するために、工業開発に対して厳格の農地保護制度を設定し、それに基づいて、集約化工業園区の形をとった。また、2005年に、46村の人口移動による空洞化で、余った住宅地を整理して、新たに、1050ムの農業用地が増えた。

崗上村は、一つの村として、都市化・工業化進

展の中で、技術、人材、市場、標準化において、工夫を重ね、農業は、どのように維持し、発展するのか、農村は、どこに向かうのか、農民は、いかに豊かになるのか。彼らは、自分たちの価値観を持ちながら、暮らしの現実の中で、農業・農村・農民問題の解決を自らの道を模索している。

III 「以人為本・節約型社会」—市政、環境、都市計画、社会保障—

藁城市には、村、郷・鎮、市三つのレベルの行政府がある。それぞれの課題が違うが、市政府の政策は、全体に対して、決定的な影響を与えている。

市の人民代表大会は、政策、法令の立案機関で、市の共産党委員会は、事実上の政策の決定者である。市人民政府は行政府で、市の政治協商会議はこれらに対して、監督の役割を果たしている。

現在、藁城市政策決定、行政、監督のそれぞれ上部構造の全体的な意識が、「小政府、大社会、以人為本、節約型社会」として統一されている。

たとえば、「藁城市国民経済と社会発展第十一五ヶ年計画綱要」の中で、以下のような記述がある。

「人を以って根本になす。この理念を堅持する。人民の根本的利益を守り、実現させることから出発し、経済発展の成果は、人民生活の質の向上、健康の質の向上、平等でしかしより多い機会の創出、人的全面発達と結ばなければならない。」

我々は、市政の状況を見るために、市政府所在地の市区を訪ねた。そこで、人民広場、水上公園を見学し、人民医院を訪ね、都市建設、医療状況、社会保障などを考察した。

また、市のトップ、シンガポール留学の経験を持ち、若く42歳の市長にもインタビューをした。

藁城市の市政府所在地の市区は、14平方キロがあり、10万余りの人口がいる。

市区の中心に、1999年3月から、作られた広場がある。この広場の面積は、18.36万平方メートルで、河北省の県級市の中で、最大のものである。緑化面積は、10万平方メートルで、44種類の花、樹木が植えられている。広場の正面に、7000

平方メートルのメロディー附きの大きな噴水があり、四季を象徴する大型鉄鋼オブジェがある。広場の端に、テレビ塔が聳え立ち、その下には、大舞台がある。

広場は、市民たちの祭りなどの文化活動、大規模集会を行う場所として、また、娯楽、休憩、交流の場でもある。

広場という空間は、現代中国の都市建設の中で、よく見られる。しかし、この空間機能は、西洋とは、違うように、現在では、独自の民族、地域、文化、伝統を生かして、時代性を持つ面白い役割が創出されている。藁城市の広場の象徴的、機能的意味については、別稿で展開したい。

広場から離れ、水上公園を見た。1994年完成の水上公園の総面積157ムである。その中、水面積は40ム、緑化面積は89.2ムである。この間、ちょうど、開園以来、200万次の来園客を迎えた。市区には、大きな市民公園として、水上公園のほかにもう一つ児童公園がある。

藁城市市区の都市計画は「衛生都市」、「園林都市」、「文明都市」三つの目標を目指している。市区全体が、六つの緑化区で構成される緑地系と、運河からの引水で、市区を囲む環状水系が特徴となる。市区隣接の荒廃凹地で、地熱資源を利用し、大型温泉休暇村を建設中である。ほかには、道路交通、上下水、都市ガス、などの都市計画は、専門家の審査を受けてから、段階的に、実行に移すというシステムがある。内陸部農村小都市として、これほどしっかりしている都市計画に驚いた。

工業化につれて、日々きびしくなる資源、環境問題への取り組みを、2005年10月、市に出された政府文件「節約型社会を建設するための当面の作業計画」を通して、見ることができる。中で、今後2年間の主要任務については、主につぎのような項目を設けている。

- 1、土地利用の集約化、農地の保護。
- 2、工場、企業のエネルギー消費効率低い設備の淘汰。
- 3、農村でメタンガス使用の普及率を20%以上に引き上げる。
- 4、用水定額制度化、科学的に配分。
- 5、工業用水再使用率を84%に引き上げる。

6、使い捨て商品を減らし、簡易包装を勧める。

7、政府購買はグリーン商品に。

8、学校で、「わたしたちから、資源を大事にする」活動を推進するなど。

また、2006年6月に始まった環境プロジェクトでは、危険建築の除去、広告看板の整理、ごみの処理、水系統清潔の保持、生態緑化、大気、水汚染企業の整頓、などを実施した。

社会福祉保障について、我々は、新しくできた人民医院の入院ビルを訪ね、新型農村合作医療制度のことを聞いた。

この制度は、2007年1月1日に実施した、家庭単位で、毎年50元（中央財政援助20元、地方財政から20元、個人10元）を銀行口座に入金する。病気治療代を支払うときに、郷鎮病院では100元を超える場合60%を公費負担、本市病院で300元以上的の場合、45%を公費負担、他の地域指定病院で2000元以上を超える場合、30%を公費負担となる。一人、年間公費負担総額は、15000元以内である。

藁城市には、市のレベルの病院は人民病院と、中医院（漢方医院）二つがある。そのほか、郷鎮には「衛生院」、村には、「衛生室」という名前の小さな病院がある。2007年、7の郷鎮「衛生院」、323の「衛生室」は、標準化基準に達した。

人民医院は藁城市の最大な病院で、入院ビルは17000平方メートルの面積がある。ICUまで完備された総合性二級甲等病院である。

藁城市に、1995年障害者のための9年制「特殊学校」が作られた。現在、7歳から15歳の知的障害、聴覚障害、言語障害の子ども、少年たち91名は、10のクラスで教育を受けている。学校は現在、教職員28名がいる。学校の理念は「全面発達、欠陥を補う、技能養成、障害者を人材に」である。

我々は、今回の調査で、藁城市の全体的イメージを掴むために、多くのことを見たり、聞いたりしたが、時間の制限と大量な情報を整理するために、取捨しなければならない。たとえば、きわめ

て重要な教育問題、農村家庭の問題、工業誘致の問題などの調査の手薄さと、触れる暇もないということで、今後の課題にしたい。

藁城市現在の主な問題点については、市長に尋ねると、とても印象深い話をしてくれた。

「藁城市の経済構造はまだ、不合理の面がある。発展の様式も考える余地がある。とくに、サービス業は、まだ遅れている。企業全体の科学技術進歩への貢献度がまだ低い。エネルギー、資源の節約、環境保全、福祉、教育の改善がまだ、たくさんのしごとが残っている。わたしたちは、自分で、自分に圧力を掛けないと、前進できない。」

おわりに

調査を終え、我々は、しばらく時間を置きながら、日本から、藁城市を観察した。

この間に知った二つの話を紹介しながら、今後の課題を考えてみたい。

「市長信箱」

藁城市市長への公開メールアドレスがある。たくさん寄せられたメールの中では、次のものがある。その概略を紹介しよう。

「わたしは、藁城市出身の大学生です、故郷の近況について、自分の意見を言いたい。

- 1、先日、大勢の大学卒業生は、村官になった事を知り、たいへん心強くなった。このような政策はぜひ続けてほしい。
 - 2、藁城市で有名な宮面（宮廷風麵）、鴨梨（一種の梨）、ゴン家荘の工芸品などのよさをもっと、外に向かって宣伝してほしい。
 - 3、藁城市に、台西遺跡がある。これは重要な文化財で、それを大事に保護し、観光資源にもなれる。
 - 4、藁城市のテレビ局の番組は、変な広告が多い、独自性はない。
 - 5、徐村から丘頭鎮までの道路の修繕が必要。
- 以上の拙見をご参考ください。」

「大学生村官」

上記の市長へのメール内容の中にも触れた「大学生村官」とは、2006年に、藁城市が実施した村長の助役クラスを大学生から公募で選ぶ制度である。

2007年7月1日、藁城市、初めて、717名の大学卒業生から公募した80名の大学生は80の村に赴任した。

彼らの後を追ってみた。たとえば、河北農業大学動物養殖と疾病防止専攻の孟桂艶は、中ヨウ村の副書記になって、村の食用牛飼育、病気予防、治療の仕事に取り組んでいる。

石家荘学院教育系を卒業した李文化は、農村未成年犯罪問題を防止するために、毎週、村で父母と子供たちにさまざまな講座を開いている。

九間郷のそれぞれ五つの村に赴任した張海江、王彦シンなど、5人は、村民たちの願望に従って、郷の「第一経済合作社」を作った。

新農村、新産業、新環境を作るために、彼らは、今日も藁城市農村第一線の村で、自分たちの若い力を発揮している。

藁城市において、単に、特定の政治権利や経済権力に取り込まれることで、住民の根本的利益を背けるなら、おそらく、今日の藁城市の発展はないと思う。藁城市の政策立案者、行政は、いかなる形で、民衆の内発的発展の願いと力量を汲んでいるのか、その詳細を今後の研究で明らかにしたい。

我々は、この地域の過去を知るために、梅花鎮大虐殺記念館を訪ねた。そこでは、日中両国関係の歴史、この地域に残した悲惨な一頁を目にした。過去を知り、未来を開く、両国の相互理解を深めるために、我々研究者にとって、日中共同研究をこの地点から展望する必要があると感じている。

附記：

調査を協力してくれた王普増市長をはじめとする、政府弁公室の方々に深く感謝します。